



歌詩野路弦玉川  
後篇  
壹

遠  
975  
6



遠門  
975  
卷 6

本清

復讐野路の玉川後篇目標

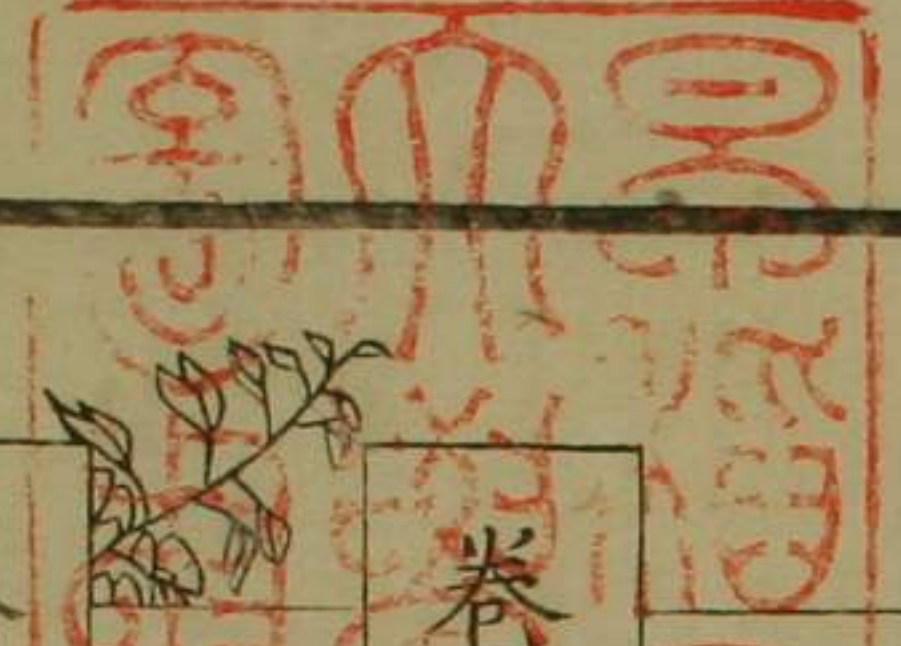
卷之第一 花街の御拔 遊君の色揃

卷之第二 樓上の空蟬 櫻宮の朝露

卷之第三 外山の蘿葛 首途の嘉祝

卷之第四 驛路の興宴 古跡の仇討

都合四卷通計八回



淡海國大津驛ヨ  
草津驛ニ至ル  
道條之圖

其帆引マ

矢後ヨ

ノ家

舟ハマ

打玉乃

濱ト

あやの

おひ風



雲々々々  
嵐々々々  
千々々々  
浪乃  
栗津ヨモ  
家



江州草津駅  
乳母が餅屋の圖



復讐言野路の玉川後篇卷之一

滄海堂主人編述

○花街の御枝

思ふ事とぬつとぬとく麻の葉と切まきりても枝つる哉と  
和泉式部の詠せし水無月の御枝乃哥ふしとくまを  
荒和の枝とつひ又の名越のそひもつとされば今諸社  
おわく俗は夏祭りと祢ふるの皆是和能枝りく大内  
大枝の例よよもるゆれとぞ去る浪花江の三津の濱

る。天皇の宮も水無月十五日は御技の祭祀おこさる。  
 おより三津の泊に遊女町より神いさめとく女伶妓婦  
 乃輩のあつく姿と優し衣と飾り錦繡と身し絡ひ或  
 男の形勢も愛し若も老の風俗し前囃子後を  
 やしやと号け琴三絃胡弓太鼓鉦笛よていさめしく  
 拍子とり烈し行くとゆり是と俗も遷りぬとよりあつ  
 とも此祭日より已前青楼の軒端と練ゆくゆは其日  
 定まれば遠近の衆人こまると見物せんと羣集さるること

恰も潮の涌ぐごとく。既も六月十一日の夜は全く衣裳万  
 端そろひて練出るす。聞へく西川屋の禮三郎はこの  
 定まる日と待て京師は飯と見合せし変るれば晩刻より  
 金剛力藏と伴ひ連て坂松屋何某がゆくと来臨し是は  
 且那の光来と亭主ととらめ茶車仲居榎で庭とべとん  
 ちる大座敷に案内し。御茶よ御菓子よ烟草よと云  
 ねどもろく銚子蓋つぎと酒宴の高机色よと器は山海  
 の珍味珍肴充滿て酒池肉林も余る。びくびくはどよ



カ  
あいう  
の  
らう  
モウのりん

た  
ん  
あ  
ま  
ん  
さ  
せ

里路の玉川六



げ  
カ  
む  
わ  
の  
さ  
せ

八  
車

礼  
三  
良

川  
浪

約束の八重巻をどめ貝の肩の奇妓ホ招ふ随ひ追くよこて  
 小集ひく今様の唱奇と侃ひ三絃と弾つゝ太鼓とうち  
 或ハ舞あり放節ありて己がまふく藝と尽し酒とすめり  
 郷食應りり儲も料理人の九助のさだの程お鮎が文と奪し  
 とい夢よごんあござれば烟草袋と残るる大津の文と打  
 忘まごころが変のこよ心とよせしうぶ是と八重巻への艶書と心  
 得宜首尾わく渡さんと伺ふ折くく八重巻の手水は行  
 んと庭前より裏口は立出るは是幸と文とら出詞も

うけハ八重巻が懐は押こころ言ぬ心と目であせ急しく  
 も秋と退出ぬ八重巻の打おどろき甚いやうしく思へども  
 甬ろく其所は捨もやうまび其休しそ秋方退き  
 蜜は表の名書とんまび吾身は送る文はあて阪松  
 内九郎藏どのく大津の岩右衛門よりと手づから記勇の  
 手跡は八重巻一向其意を得て不審ハおのくも正しく  
 敵の手がらうま給くさるれ一通るれ座敷の首尾を見合  
 せて力減は手こぼせんと彷徨折く座敷より八重巻主の

何方たつより早はやく来るき来きませよと仲居あひが呼よぶ声こゑは  
唯ただと答こたへて唄うたひ纏まとひ座敷ざしきに至いたる夏なつの夜よ  
ハまど宵よひの思おもひ更さらく漸ゆるく遠物とほものも来きれる  
時刻ときももろり表おもてのざらへ出いでせよ最早見附もともも  
まのりつりとを車くるまがまゝを禮三郎れいざぶろうの力ちから藏くらへめ  
この妓婦げいこ舞ま妓こ仲居あひと随したがつ軒端のき間ま近ちかく立た出でて遠とほ近ちか  
と見みぬぐはれ何なにもの門かど辺へも柵さく欄らんと結むすぶ。を中なかるる  
灯あかりと所ところせよまぐりける内うちの教しやく本の燭あかりとてせ願ねがふ

白昼ひやくちゆう又また異ことなる見物けんぶつは衆人しゆじん西にしより東ひがしより何なに  
所ところもやゆくと談わひあはせ座敷ざしきより門前かどまへの棧敷せんとき  
とまのひ見物人けんぶつにんの價あひととりて杖つゑ処ところはつぐむる由よし或あるの  
一間いつけんと仕切しきりて買かひあり。又また割合わりあひの場ばを買かひあり是これと進すすむ  
男おとこ口くちぐほく言いふゆり。田舎人いんげにんの愚鈍ぐどんとて其價そのあひと定まる  
彼是かれこれと時ときとらつらあり。菓子かしとどりれと鬻うりつら杖つゑ遠物とほもの  
形勢かたちと板行いたんと画え引ひ合せの番附ばんづけと声高こゑたか中なかり賣うり  
ゆりゆり。客先きやくさきは走る哥妓げいこホつひよとける途下みち下くだ駄だの丸まる



よろろたると軽き草履とくら三味線いさむ暇もなれば延  
 々すうて男よのうせ羣集の中をおうらひて行もろて  
 其賑わいとて言語は絶り既相圖の拍子木の音聞ると  
 ひびく先と拂ふ警固の人々何れも一様の帷子を着て手みぐ  
 あるは提燈をひき二行は列し甚嚴に進み續て高き  
 臺の物も多く人々うらりて来るは是則ち當邊物の見附  
 臺てよのけやと實奇麗いと造りぬるり

○遊君の色揃

八幡山はとれ初めあれ内は猶万代と松風とくと新續古今  
 集よとへる石清水正八幡宮の神徳を祝はせり御製之  
 茲又浪卷江の御津に宮ひ神廟も此太神と祭まるゆり  
 世俗御津の八幡も尊号せり偕も今年水無月御抜乃  
 神慮と清しめれ産地の女伶妓婦の輩姿と優に邊物に  
 始ととれ見附臺をきて持て来ると詠むるふ千歳古わ  
 松が根は神の宮居と結りて作り前は御注連あひまらせ  
 唐櫃一合と居置り是は年毎に雄徳山にて極月朔日行ひ





稀るよー。されば多くの幸と経られ。今知人のさだも宜なり。  
 原来其出立の面と白き布とそつと。折烏帽子とつと。赤  
 赤と色るる布衣と着し袴のそと高くとり。藁の脛巾  
 又乱緒の草鞋とつと。又此妓婦がすぐさよ。  
 頭る異なる所。何と夫の今様の優し。凡そりと語を聞  
 衆人の忽ち不審とれ行くと喜ぶ折ると續て来る  
 風俗の薄き絹と頭と頂と傘の形。團と携へ打り。つ  
 つ歩り。是もひとく其意と得。議論すらく成る。

彼老人。重くつと。此は女よ。我も惑。さりあがる。番組の  
 列して。えき納涼。よろしく末廣。がりと記。されば能狂言。番  
 の内。末廣。がりと言。る。是。其主人の大名。あり。召仕。ふ太  
 郎冠者。よ命。と末廣。と需。し。冠者。おろ。り。傘。と  
 需。り。携。へ。歸。る。狂言。の。全。く。其。太。郎。冠。者。の。姿。と。優。せ。し  
 め。る。と。携。へ。る。團。の。形。と。傘。を。作。り。雪。の。せ。か  
 け。紋。と。つ。け。裾。の。模。様。の。紋。尽。し。狂言。袴。の。意。ある。べし。然。ども  
 此。好。し。い。エ。は。過。て。形。と。失。ひ。り。実。過。る。へ。及。ぶ。る。よ。ま。る。は。と。云。る

金言も斯ることや言べられと語る向ふ引つさ亦も練  
 来る優姿へ田舎娘の風俗も若菜と入一箇の藍で左  
 此手よを提めらるり是るん古と哥あも多く春の野のせ  
 又若菜と摘る雪解の水は齋と濡せるあど詠るゆれま  
 若菜摘とこよと題せり借又正月の上の子は日又若菜と  
 帝は奉る更の公事根源も正しく出る若菜蕨菜蔓草  
 芥蕨芥菜芝蓬水蓼薊松ホ都合十二種供するあり  
 将尋常の若菜と黄卷蒿とこへ佛座菜青菜芥  
 蕨菜摘とこよと題せり借又正月の上の子は日又若菜と  
 帝は奉る更の公事根源も正しく出る若菜蕨菜蔓草  
 芥蕨芥菜芝蓬水蓼薊松ホ都合十二種供するあり  
 将尋常の若菜と黄卷蒿とこへ佛座菜青菜芥

春都合七種と用わると是は大内の更なれば此よつてくも有  
 されど便に任せと説りぬらりとつゝ間あはせ打つれて  
 練来る者の夏の夜の鶴飼姿は能出扮かゝる網代の笠と  
 つゞき身の薄衣大口袴腰は辺は簑とまゝ右は松明ふり  
 て左は二羽の鶴と引つ甚風あも歩もさう夫鶴と飼こ  
 諸國もあり何國と定むる更なねど就中美濃国なる長  
 柄川は漁る者殊更に妙と得る則ち長柄の急流の若面  
 と早走る鮎と獲ぬ市は鬻ぐと業とせり。されば細く獲

のり其肉味多うく○そのあひつひ 比島津鳥鶴の獲○しつづい 魚の美くして其味うと。うづ  
 まりとぞ○とよをやまひ 凡弥生の頃よりとどめ兼月の末と限○とつと 了とすすく ことども  
 五月六月の両月と專アキカウ とるゆら ぬくは○う 奇ま も夏よ の夜川よ と詠よ こと  
 又出立仕装束○とらしやうぞく の猿樂さるがく の謡曲うた 又何う 鴨飼う の風かぜ まりと語かた るは ほど  
 するさ 彼方○しと より閑雅あや 又歩あ くる其出立○そのいで の羽衣とごも の備たひ くる振ふ  
 袖そで の裾すそ は浪なみ 又磯馴そ 木の最○つと とび申ま する見み くるが望のぞ 一管いちくわん 又  
 手て 又さく○それ くり是これ も謡曲うた 羽衣う 天津あま 乙女むすめ の次女よめ とよ くらせ  
 のれとあ○この ころりころり 故この 故事こと の古昔ふるむかし 又駿河しづな の国くに なる三保さんぼ が寄よ

又天津○あま 乙女むすめ の降くだ り来て磯辺いそべ の松まつ 又羽衣う と脱ぬ け置お けと漁い  
 夫お 又奪うば りを強あ ち返かへ すと○あつ 吾妻あづま のをびふ 舞曲まひ と奏そう 一  
 漸あ 又取と せしことと謡曲うた 又作りつく くり○すま 頗し る人口くち 又膾炙くわい せし  
 されども突と 神代かみよ 又天あま の羽車う と○その ろりのろり の何なに 命いのち の乗の せ  
 又○その 其羽車う と羽衣う と言い 何なに や○あ ずりて天人てんじん の根ね あり  
 又と○その 附會ふかい せし後世ごせい の説せつ あり人と貝原かいげん 公羽こうう の何なに くらせし吾  
 妻つま の記き も書か き○これ ら然しか ども故この 吏し のここ 又言い ても済す め○あ 又あ 又あ 又あ  
 彼あ 嬋娟めいけん ぐ○この といい 六む 謡曲うた の羽衣う の天津あま 乙女むすめ と優あ へ○あ る人と

詳フダシ又マタ語コトる其その詞ことば々々續つづきつて来きるハ唐たう土どの女に官くわんハハ安あん又マタ出い立だく  
 芙蓉ふよう花はな枝えだとと竹たけ音ね高たかく歩あむむ後のちよりより  
 一個いっハ玉たまの冠かんと頭あたまとと身みハ唐たう土どの官くわん服ふくとと團だんとと是これ  
 も又マタ音ね々々歩あ来きままるる是こハ羽う衣い鶴つる飼かひははひひ々々感かん  
 陽宮やうきうの謡曲うたより思おもひひよりより來きるる安あん女にららくく先まにに進すすみみ女に官くわんの  
 了りょうここハハ唐たう陽やう夫ふう人じんとと換かせせし者ものとと後のちにに立たつつ帝てい王わうハ秦しんの始し  
 皇こうニ形かたちととるるゆゆねねるる則すなはち秦しんの始し皇こう帝てい感かん陽やう宮きう内ないにに燕えん  
 の国くによりよりままつつりりるる使しの者ものハ計けい畧りやくよりより既すでにに危あやししくく見みららじじとと

華陽夫人の玉たまハ琴ことの曲まがよよととくく脱だるるとと手て段だんとと奏そうしし奉ほう  
 ずずハ危あやししくく難がたととままぬぬぐぐままるるゆゆねねるる目め出い度たたためめははよよるるゆゆねね  
 りり諸しよ其その次つぎハ始はじめにに似につつるる下しも品もののすすまま上うへ髪かみの世よ話はなし  
 女房湯屋にようとうやゆゆめめるる浴衣ゆいがけ帯おびととううへへ手て拭ぬぐぐ下した  
 駄だをを死しるるはは歩あむむととりり是こハ故ゆゑ車ぐるまハ由よし來きりりもも愚おろちち童どう也なり  
 けけはは分わるる雪ゆきの肌かわつつまま來きるる風かぜ倍ばいハ一ひと際ぎはららるる御所ごしよ女に中ちゆう  
 鞠まりゆゆひひつつけけ梶かぢの枝えだとと手てはは持もつつてて歩あむむととりりもも梶かぢの葉はとと  
 鞠まりゆゆつつままるる七なな夕ゆふけけ例れいとと其その御家ごけの上うへつつままるる必かなずず使し用ようととぬぬ





とぞ又梶の葉は奇なりと書く星は手向る変じもい古昔より  
 の例も其説種々多かりと偕又後より来たるの甚もや  
 さしき少女が衲福の衿と小ぶくんとさしき鹽のごとく平桶  
 二鯉一喉と入ると恭しくも両手はすへ徐々として歩けり  
 是のいりある故ぞとて番組とひくことさしき一夜官女と志は  
 たり。されば秋縁故の揚州西成郡の内は野里とある村里あり  
 こゝは産土の神社あり祭まる所の任吉大神なるが例年  
 正月廿日と以て祭祀と行ひ村中の少女八人下髪はゆひ

衲福と着し四社の明神は鯉鯢鱸の類いと供びすまら  
 秋日神変まつとて賤の少女が一時間のうら上臈姿は出扮  
 文は世俗一時上臈と号け又一夜の官女もついで実も  
 古雅なるまるとと始終とくる後辺より三絃太鼓つ  
 一奏笛小鼓は摺鉦の音は高くととつ歩来くる  
 形勢は烏帽子狩衣爽は紅の袴と着せるが都合十個の囃  
 子りと皆一樣の出扮く偕又家体の正面より朱の鳥居と美  
 しく八幡宮の額と掲げら左右は朱の瑞籬とがましく千

一の紅葉の枝とくざれて是ぞ名ある遷物の後囃子と  
 りみまどろりる。續々と大勢うと荷ふ見送り臺へ古昔の  
 御津の神庫に納せれる木をて作てし神馬とて幾代も  
 とも余の品は遠く爰に用ゆると嘉例とるは実や馬は六畜乃  
 其一とて畜は在て火は屬し。辰は在て午は屬し卦は在て乾とは  
 方位よりて南は所謂浪華の南は花街陽氣繁榮を主  
 る。と御津の神廟の神庫の馬は吉例は日出度りりる  
 復雙言野路の王川後編卷之一終

更にもあへり

